

いま、中学生が訴えたいこと

青少年の非行の芽をつみ、心豊かでたくましい青少年を育てるためには、何よりも健全な家庭環境が大切です。6月30日(土)に文化センターで「東浦町非行防止と青少年健全育成町民大会」が開催され、青少年対策の重点目標や事業計画の発表が行われました。また、「いま、中学生が訴えたいこと」をテーマにした中学生の意見発表もありました。発表された中学生の意見を紹介します。

●問い合わせ 生涯学習課(文化センター内) ☎83-9567



海の環境を 守りたい!

東浦中学校 2年
小早川 有希さん

あるとき、「ごみを捨てないで!」という看板が海の近くに立てられているのを見つけました。それを見たときに、なぜこんなところにあるのだろうと私は思いました。道路の近くには落ちているごみをよく見ます。でも、海にごみが落ちていたりころはあまり見かけたことがありません。私は不思議に思っ、砂浜に行ってみました。すると、空き缶やビン、お菓子の袋やタバコの吸い殻などがたくさん落ちていました。海にもごみがたくさん落ちていたなんて、今まで知りませんでした。

しばらくたって、夏休みに家族で水族館に行きました。きれいな魚やペンギン、イルカなどたくさん生き物がいた中、ウミガメの展示が目にとまりました。「ウミガメの海を守って」展示には、近年海に捨てられるごみが増え、海に住むウミガメなどの生き物に害を与えていることが書かれていました。ウミガメはクラゲを食べます。そのため、海に捨てられたビニール袋をクラゲと間違え、誤飲してしまうそうです。このように、ウミガメだけではなく、たくさん生き物が命を落としていることを知りました。

夏休みが明けて、普段の学校生活に慣れてきた九月の終わりに新聞を見てみると広告欄にこんなことが書かれていました。「知多の砂浜ごみ拾いボランティア 参加者募集中」 「これだー」と、私の中で何か響きました。少しでも海の生き物たちの力になりたいと思いつつ、さっそく参加の申込みをしました。

ごみ拾い当日、軍手をはめ片手に火バサミを持ち、他の参加者の方々と砂浜に向かいました。砂浜には、やはりたくさんのごみが落ちていました。私が見て砂浜のごみを見た場所とはちがう浜でしたが、同じようにビンや空き缶、ライターなどがありました。私は、どんなに小さなものでもどんなに汚れているものでも、一生懸命に拾いました。作業に集中すると、大きなごみ袋もすぐにパンパンになります。海はとても広いのであまり気が付きませんが、本当はたくさんのごみがあるのを知ることができました。午前中の早い時間から作業を始め、お昼ごろに終わりました。私たちがごみ拾いを行ったのは、知多半島のごく一部の砂浜でしたが、ごみを拾う前は、あちこちに落ちていたごみが、終えるころには見える範囲ではきれいになっていて、とてもスッキリした気持ちになりました。

海が汚れている現実と向き合ったときに、海をきれいにしたいという気持ちと、海の生き物を助けて守ってあげたいという気持ちと、二つの感情が生まれました。そこで私たちにできることはどんなことを考えました。

私たちは、目に見えるものや自分の都合だけを考えて生活しています。しかし、視点を変えて考えてみると、苦しんでいる生き物たちに気づきます。私は、ごみ拾いに参加したからといって海が汚れていることに気が付きませんでした。

でも、以前の私のように、海がこんなにも汚れているという実感がまだ無い人もたくさんいます。そこで私は、海が汚れていると言うことを伝えて、広めていく必要があると思います。また、ごみ拾いなど環境を良くする運動に積極的に参加することも大切だと思います。このような運動に参加すると、今おかれている現状を把握することができ、今後の自分の行いについて考えられるとても良い機会になるからです。さらに、環境を良くすることで、他の生き物たちも安全・安心に暮らせると思います。

明るい社会とは、誰もが安心して暮らすことのできる社会のことだと思います。それを実現するには、人間だけではなく、他の生き物たちも生活しやすいような環境を守りたいと思います。そんな環境を守りたいというこの気持ちをいつまでも持ち続け、まだ現状を知らない人たちに伝えていきたいです。



「思っているだけ では変わらない」

北部中学校 3年
石川 蒼乃さん

「一人が思っているだけでは、何も変わらない」これが、私が皆さんに伝えたい主張です。私がそう考えるのは、ある体験をしたからです。そして、それらの体験は私を変えてくれました。

一つ目は、東浦町内の様子についての体験です。私はいつも自転車で登校しているのですが、通学路にたくさんのごみが落ちているのです。私はそれを見ても何もせず、嫌だなあ、何でこんな場所に捨てるのかなと思いつつ通り過ぎてしまっていました。

ました。

ある日、東浦マラソンのためのごみ拾いボランティアに参加しました。ボランティアに参加することで何か変わるかも思えないと思っただけです。ごみ拾いを始める前に他のボランティアの方から、「東浦町は毎年、走るコースがとてきれいだ」と町外の人からほめられて「なんだよ」と聞きました。私は、それを聞いてうれしくなると同時に悲しくなりました。町外の人からきれいだと言われたことはうれしかったのですが、ごみが落ちていないのは走るコースだけで、他の通学路や竹やぶ、それに畑にまで、まだごみはたくさんあるのにと思っただけでした。

また、別の日に私が部活をするために学校へ向かうとき、二十人くらいの大人が通学路や竹やぶの中のごみを拾っているのを見ました。私は、「この人たちは自分で思っているだけでなく行動できる人たちなんだ。こういう人たちが東浦町を変えていくてくれているのかな。自分とは違うな」と思いました。そのときも「思っただけで行動することはありませんでした。」

一つ目は、学校で行っている募金についてです。私は、世界には貧しくて学校に行けない子どもが大勢いることを新聞やニュースで知っていました。そして、そういった子どもたちのために募金活動をしていることも知っていました。しかし、私にはかわいそうだなと思うだけで募金をしようとは思いませんでした。

そんな私とは違って、子どもたちのために募金をする友達がいきました。彼女を見て、私は自分が恥ずかしくなりました。かわいそうだと「思っただけで何も行動しなかったからです。そして、彼女は「思っただけでなく行動できる人なんだ」とも思いました。

この二つの体験は、私に「思っただけでは変わらない」ということを教えてくれました。自分が嫌い、面倒くさいなど思うことは、みんな嫌だし面倒くさいものです。そして、よくなるという「思っただけ」ではなく、行動できる人たちは、それらをすべて「思っただけ」では終わらせません。

せんが、世界を救う人たちだと私は考えました。「思っただけでは何も変わりません。行動しなければいけないのです。ごみを拾うことだって募金をすることだって、直接ではないけれど世界を救うことにつながっていきます。ごみを分別すること、水を節約すること、さらには食べ残しをしないこと。それだけでもよいと思います。そして、スタートがそのように小さなことでも、多くの人が行動していけば、やがて大きな問題も解決に向かうのではないのでしょうか。

そして、私自身にも出来ることがあるのわかりました。今この瞬間から、たとえ小さなことでも「思っただけで終わるのではなく、「行動」に移していこうと思います。」



平成30年度

社会を 明るくする運動 優秀作品

優秀作品に選ばれたポスターと習字が会場に展示され、表彰式が行われました。
(敬称略)

学校名	ポスター		習字	
	5年	6年	5年	6年
森岡小	-	-	鈴木 千晴 しんかい ちほる	新海 真子 しんかい まこ
緒川小	-	-	内田 涼太 うちだ りょうた	新美 和奏 にいみ わかな
卯ノ里小	うのほら 東原 ひろな あきはら ひろな	-	田中和佳奈 たなか わかな	岡田 心音 おかだ こころ
片葩小	-	-	山本 結愛 やまもと ゆな	大石ゆりか おおいし ゆりか
石浜西小	こぎかい さくらこ 小坂井 桜子	よしなが のん乃 よしなが のん乃	おぎさき まなみ おぎさき まなみ	久保田 楓 くぼた かえで
生路小	-	いとう かえで 伊藤 楓	ながさか たいら ながさか たいら	みなと ひより みなと ひより
藤江小	-	-	やまもと ひなの やまもと ひなの	にいみ なおき にいみ なおき



「共存」
～理想の町へ～
西部中学校 3年
こやま まき
小山 真輝さん

住みやすい町とは、どんな町だろう。これは、私たちの永遠の課題である。私の描く理想の町は、人と人が、程よい距離感で関わり合い、誰もが「共存」していけるという町だ。今回私は、この共存という言葉に着目して未来の姿について考えてみた。

共存を辞書で調べてみると、「同時に二つ以上のものが共に存在すること。特に、自分も他人もそろって生存すること。」と記されている。これは人間に限ったことではなく、生き物や

自然などさまざまなものにも意味する。

しかし、共存というのは、その容易なことではない。なぜなら、自分と同じ意見をもった人ばかりではないからだ。賛成派もいれば、反対派もいるところだ。自分とは違う意見や考えをもった人と分かり合うというのは、簡単そうに見えて、実はかなり困難なことなのだ。誰にでも感情があるからこそ、難しいことであり、時にはぶつかり合ってしまう。私も、実際に経験したことがある。相手と自分の意見が食い違い、お互いがどうしても自分の意見を譲らず、自分の思い通りにしたくなってしまうこともある。そういうときに、ただ自分勝手に意見を通すのではなく、相手の意見を取り入れ、どちらも納得するような意見を導き出すことが、一番大切なことである。このような異なった考えを受け入れることは、時間が必要である。間違っただけを指摘し合い、歩み寄り、良い方向に進めていき、お互いを尊重し合うこと、助け合うことこそ、立派な共存ではないだろうか。

ひとつの例として、「地域福祉」も共存といえる。この先人口が減少し、少子高齢化が進み、生活上の支援を必要とする人が増加していくと予測される。環境が変化し、常に進化し続けるこれからの時代には、共存は必ず必要なことであろう。地域の人人々と、さまざまな福祉関係機関が協力して、皆で支え合う文化を築き、生活が困難な人や、家族が自立していけるような町になっていることが理想である。

そして、ともに生きることの大切さは、人間だけではない。私の住んでいる町は、多くの自然があり、さまざまな生き物たちも住んでいる、とても素晴らしい町だ。だが、近頃、私たちの町に限らず、新しい施設や建物を建てるなどして、人々から愛されていた大切な自然が、簡単に壊されていってしまうことが多くある。世界的に見ても、少子高齢化や地球温暖化が凄まじいスピードで進み、人間が快適に暮らせるようになると、技術も進化を繰り返して、どんどん便利なものが増えていく。しかし、この地球で暮らしているのは、人間だけではないということをお忘れはいけない。人間の都合

だけでこの世の中を動かしていくと、今よりもさらに多くの生き物が犠牲となってしまふ。これでは共存していけないのである。自然と人間の共存は、人間同士の共存よりもはるかに難しい。このことを理解した上で、自然と人とのバランス、人間同士のバランスを上手く保ち合いながら、すべてのものが共存していくということが、これから私たちの手で、私たちの町をさらによいものにしていく鍵となるであろう。未来を変えられるのは、私たちしかないのだ。

私たちの願いは、十年後、二十年後に安心、安全な町に住み、生き生きと暮らしていること。そして、皆の幸せを願い、それぞれの夢の実現に向けて、家庭、学校、地域が調和することである。今自分がすべきことを考えた時、明るい未来を思い描きながら、少しでも地域社会の役に立てるような、自立した大人になることが私たちの使命なのだ。



社会を明るくする運動優秀作品表彰式